



## コラム・志 ～ 神戸で語り継ぐ災害医療 ～

小林 一郎

トリアージDVDの注文はある日突然、メールでやって来ます。

最初は問い合わせの形で始まったやりとりは、思いもかけない展開になりました。

「大学で将来養護教諭になる学生にトリアージについて教えています。適当な教材を探していましたが、ところ貴社のホームページでトリアージの教材を知りました。養護教諭は学校で子どもたちに健康管理と健康教育を担当します。ぜひ、実習で取り入れたく」。ああ、授業で使うんだな。クイズ形式の設問は理解の達成度合を試すには手頃なので、それに気づいたのかな。しかし、まずは先方の意図の確認。と思い、返事を書きました。

「お役に立てて光栄です。私は以前、神戸で報道の仕事をしていました。震災時はすでに離れていましたが、特集番組の制作に駆り出され、変わり果てた市街地を国道沿いに取材したものです。トリアージの啓発活動を始めたのも神戸の経験からです。医療情報が市民に十分伝えられておらず、医療従事者だけの知識であったために、その理念と仕組みが活かされませんでした。数年前、私は「人と防災未来センター」に招かれ、トリアージの講演をしました。10年が経とうとしていましたが、記憶は生々しく、経験を踏み越えた教訓がどのように受けとめられるのか、不安が残りました。しかし、多くの市民はトリアージが出来なかった事実も知らず、またそれが都市型災害に役立つことに思いもよらず、むしろ災害時の救命手段として有用だという反応を示しました。もっと早くに、もっと多くの市民に伝えておけば・・・。

取材で無念さを伝えるのは簡単です。しかし、それだけでは地域は強くなりません。命の大切さも守られません。やはり、それを防ぐ知恵の敷衍と分かりやすい行動が不可欠です。どうぞ、若い学生さんたちに1995年の神戸の教訓をお伝えください。」

すると、このメールの返信を待っていたかのように続報がありました。

その方は、50歳の時に東灘のマンションで被災し、全てを失って西宮で避難生活を送ったそうです。「助けて頂いた。生かして頂いている」と言う思いが今でもあり、教職を定年した後、和歌山県の医科大に入り、勉強を続けるかたわら大学の非常勤講師を引き受けたとあります。「子どものいのちを守る 養護教諭を育てるため」、それを支えにしているとメールは締めくくられています。

東灘区では多くの方が亡くなりました。文中に「翌日、東灘から泣きながら、道路や線路の上を歩き西宮に向かいました。報道関係のヘリコプターの音が耳に今でも、残っています。」とあります。異様な騒音と巻き上がる土煙、救急車両のサイレンの音……。記憶からぬぐい去れないものばかりでしょう。……災害とは、安穏な暮らしと快適なぬくもりを容赦なく奪い去ります。

メールのやりとりをするうちに、私は涙が止まらなくなってしまいました。神戸の取材で気づき、静岡で形を見つけ発展させたトリアージ啓発の一つの方法が、神戸で教材になったのです。何という巡り合わせ、いや必然かも知れません。思いは出発の地に戻ったのです。

そんな興奮が消えかかった数日後、再び先生からメールがありました。

「早速、今日17日学生に見せます。初めてなので、私の説明がうまくいくか心配ですが・・・」。

発信時刻は午前5時40分。震災と同じ払暁でした。 ■■